博士論文要旨

論文題名：近代〈軽井沢〉の成立に関する歴史地理学的研究
―別荘地の拡大による「季節的な都市」の誕生―

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程
マエダ　カズマ
前田　一馬

本研究は、日本の近代化期において外国人避暑地として発見され、国内有数の別荘地へと発展した長野県軽井沢を事例に、「療養地」「避暑地」「別荘地」という時期的・空間的な局面に着目し避暑や療養をめぐる諸関係、時期ごとに異なる来訪者の経験、別荘地開発の拡大を検討することで、近代〈軽井沢〉の成立についてあとづけた。さらに、これらの検討をふまえて、軽井沢の母都市として措定される東京との関係性を考察した。

居留外国人によってもたらされ、都市居住者の保養行動に影響を与えた「避暑」は、近代化期の日本における新たな空間の構築に影響を与えた行為として注目に値する。本研究では、避暑地の成立や別荘地の発展に関する先行研究において不十分と考えられる①避暑と療養との関係性、②空間的な側面、③都市との関係性について議論を深めた。1980 年代以降の地理学における鍵概念「場所」「表象」「意味」を解釈の枠組みに援用し、新聞・雑誌・旅行案内書や地形図・絵地図・絵はがきを歴史地理学的に分析した。以上の視角により、避暑地や別荘地の成立や発展を空間的事象として位置づけなおし、社会・文化的な文脈のなかでよりよく理解することができよう。

まず第 2 章では、軽井沢の発展の端緒となった旧軽井沢（元・軽井沢宿）の地理・歴史的側面と近代以降の諸変化を概観した。近世の軽井沢宿は碓氷峠を控えた宿場町として活気を呈す一方、冷涼な気候と荒地のひろがる景観は寒村というネガティブなイメージを惹起していた。宿場町の衰退が進んだ 1880 年代半ば、居留外国人が旧軽井沢を避暑地として利用しはじめた結果、明治末期には木造の簡素な外国人別荘が旧軽井沢周辺に集積し、外国人向けの商業環境も整ったのである。

第 3 章の「療養地」に関する分析では、外国人の来訪に先駆けて 1880 年代初頭に軽井沢が陸軍の脚気転地療養地として見いだされた過程を、脚気の治療をめぐる医学言説の検討より明らかにした。軽井沢の冷涼な気候はネガティブな要素であったものの、近代西洋医学に基づく疾病観や環境観が浸透し、健康と結びつけられたことでポジティブな評価に転じた。とくに夏季の暑気や不潔な空気を脚気の原因とする医学的見解が陸軍に取り入れられ、軽井沢は東京鎮台の脚気転地療養地となった。陸軍以外の民間人も脚気療養をするようになるとともに、軽井沢は神経衰弱や慢性胃腸器病の療養地としても評価されていく。

つづく第 4 章では、「避暑地」の局面について分析した。療養地と避暑地の局面に関わった行為主体はまったく異なっていたものの、2 つの局面は同時代に併存していたのである。外国人の避暑をうながしたのは、彼らの居住する東京周辺の暑気や湿度にくわえて、伝染病などに対する忌避意識であった。外国人にとって軽井沢は身体を脅かす疾病から逃れうる「安全な」場所であり、長期滞在する機運が醸成されていったのである。外国人に次いで軽井沢を訪れた日本人有閑・富裕層は、当初療養目的で滞在していた。日本人にとって避暑とは、一般的には温泉地で入浴することであったため、温泉入浴を介さない避暑のあり方に疑義を呈しながらも、軽井沢の冷涼で清澄な気候のもと行なう避暑を受容したので

ある。軽井沢は、外国人と日本人にとって健康の回復・維持・増進に好影響を与える場所であり、環境認識像の変化や直接経験から社会・文化的に避暑地として構築されたといえよう。

第 5 章では、避暑の滞在拠点となる別荘の集積に着目した。旧軽井沢と隣接する原野に野沢別荘地を開発した貿易商野沢源次郎は、軽井沢を東京の「郊外」と見立てることで、土地投機の候補地として価値づけたのである。野沢別荘地は洋風住宅会社あめりか屋製の豪奢な別荘を基調とした「高級」別荘地となった。他方、旧沓掛宿の北方に千ヶ瀧遊園地を造成した箱根土地株式会社の堤康次郎は、避暑の高級志向を批判し、都市中間層向けの簡素かつ低廉な別荘地を実現した。堤は郊外住宅地や都市郊外のレジャー空間を創造した近代的な開発の「知」を野沢よりも積極的に取り入れ、娯楽的活動を支援する設備の充実化を図った。旧軽井沢で醸成された療養地・避暑地・別荘地の局面は、大正・昭和戦前期になると都市型資本の計画的な開発によって空間的に拡大することとなった。

第 6 章では、戦前期の軽井沢に形成された別荘地群を、近代〈軽井沢〉の空間的な断片とみなし、地理的位置や別荘所有者の属性などの差異によって構造化されているととらえ、「中心−周辺」構造から考察した。この構造は、既存市街地を中心とした都市化が外延的・空間的に進行する過程において、郊外と称される周辺的な空間も出現するというもので、夏季居住者を送りだした母都市・東京にも看取可能である。野沢源次郎が軽井沢を東京の「郊外」と見立てたごとく、近代〈軽井沢〉は、東京の外延的拡大のよる「郊外的な空間」と位置づけられる。さらに、〈軽井沢〉の内部には、東京都市周辺部と類似するような「中心−周辺」構造をみてとることができる。

「中心部」として発展したのは、近代〈軽井沢〉発展の端緒となった旧軽井沢であった。ここは東京からの夏季出張店が店舗を構え、「軽ブラ」と称される遊歩の場であるだけでなく、最も別荘が集積したため、強い中心性を有する。一方、「周辺部」として発展したのは、野沢別荘地や千ヶ瀧遊園地などの別荘地群である。そのなかでも野沢別荘地は、ステータスシンボル化をともないながら〈軽井沢〉の「高級化」をうながす突端となった。対称的に、千ヶ瀧遊園地とより周辺部に位置する別荘地群は、華美な避暑生活を象徴する旧軽井沢や野沢別荘地と地理的・心理的に距離を取り、「質素」な避暑生活を求める人々の受け皿として差異化された。俯瞰的にみると、別荘地の空間的拡大の結果として、近代〈軽井沢〉には「中心部」「周辺部」という異質な社会地理を帯びた都市的な空間構造が存在していた。このような構造を有することは、軽井沢が都市との関係性のなかで発展してきたことをあらわすもっとも明確な表徴であると考えられる。

以上の諸検討をふまえ、第 7 章では結論として近代〈軽井沢〉＝「季節的な都市」という解釈を提示した。地理学者クラウトは、別荘地を都市の保養的機能の拡張した空間と位置づけていたが、たんに機能面だけでなく、別荘地の内部も都市的な影響を受けながら母都市である東京都市周辺と類似する構造を有するにいたった。つまり、〈軽井沢〉はたんに避暑というシーズナルな現象が展開するだけでなく、別荘地の拡大過程で都市的な構造をもつ避暑地であった。このような 2 面性を「季節的な都市」と位置づけた。

本研究では、近代〈軽井沢〉のような避暑地の成立には療養をめぐる社会的な文脈が関わっていたこと、別荘地の空間的な拡大は異質な社会地理をもたらしたこと、そして都市との関係性は、都市と類似する地理的な構造としてあらわれたことが明らかとなった。さらに、東京の「郊外化」という空間的な現象は都市内部にとどまらず、都市外部の保養地の成立に関係していることを提示することができた。本研究は、軽井沢という一地域の事例ではあるものの、近代化期に発展した避暑地や別荘地の成立背景や過程、内部の空間構造の類似性や差異を比較検討していくうえで、有意な地理・歴史的な立脚点となるだろう。